

世界漫遊

ダウイット Jacob Julius David

森鷗外訳

青空文庫

ウイインで頗る勢力のある一大銀行に、先まずいてもいなくても差さ支しのない小役人があつた。名をチルナウエルと云う小男である。いてもいなくても好いいにしても、兎とに角かくあの大銀行の役を
しているだけでも名誉には違ちがひない。

この都に大勢いる銀行員と云うものの中で、この男には何の特色もない。風采ふうさいはかなりで、極力身なりに氣を附つけている。そして文士の出しゅつ入にゅうする珈琲店コオファイテンに行く。

そこへ行ゆけば、精神上の修養を心掛けていると云う評を受ける。こう云う評は損にはならない。そこには最新の出来事を知つていて、それを伝播でんぱさせる新聞記者が大勢来るから、噂うわさ評判の源にい

るようなものである。その噂評判を知ること、先ず益があつて損のない事である。

この店に這はい入つて据たわると、誰たれでも自分の前に、新聞を山のよ
うに積み上げられる。チルナウエルもその新聞の山の蔭かげに座を占
めていて、隣の卓たくでする話を、一ひと言も聞き漏さないように、氣
を附けている。中には内で十分腹案をして置いて、この席で「洒し
落やれ」の広めをする人がある。それをも聞き漏さない。そんな時しん心
から笑う。それで定連に可哀かわいがられている。こう云う社会では

「話を受ける」人物もいなくてはならないのである。

こんな風で何年か立つた。

そのうちある時、いつも話の受け手にばかりなつていた、この

チルノウエルが忽ち話題たちまになった。多分当人も生涯この事件を唯一の話の種にすることであろう。それをなんだと云うと、この男は世界を一周した。そこで珍らしい人物ばかり来るこの店でさえ、珍らしい人物として扱われるようになったのである。この男がその壯遊をしたのは、富籤とみくじに当たったのではない。また研究心に促されて起たつたのでもない。この店の給仕頭は多年文士に交際しているので、人物の鑑識が上手になって、まだ鬚ひげの生えない高等学校の生徒を相そして、「あなたはきつと晩年のギョオテのような爛ら校の生徒を相そして、」熟じゆくした作をお出しになる」なんぞと云うのだが、この給仕頭きよの如ごとき眼光を以もつて見ても、チルノウエルを研究家だとすることは出来なかつたのである。それから銀行であるが、なるほどウ

イインの銀行は、いてもいなくても好い役人位は置く。しかしそれに世界を漫遊させる程、おうような評議会を持つている銀行は、先まずウイインにも無い。

*

*

*

文士珈琲店の客は皆知り合みないである。その中に折々来る貴族が二人あつた。それが来るのを、定連は名誉めいよとしている。二人共陸軍騎兵中尉で、一人は竜騎兵、一人は旆騎兵はいきへいに属している。

中にもどこへ顔を出しても、人の注意を惹ひくのは、竜騎兵中尉の方である。画えにあるような美男子である。人を眩げんするような、生々とした気力を持つている。馬鹿ばかではない。ただ話し振りなど

がひどくじだらくである。何をするにも、努力とか勉強とか云うことをしたことがない。そのくせ人に取り入ろうと思うと、きつと取り入る。決して失敗したことがない。

この二人は大抵極きまった隅の卓たくに据わる。そしてコニヤツクを飲む。往來を眺める。格別物を考えはしない。

用事があつてこの店へ来ることはない。金貸しには交際があるが、それはこの店を禁物にしている近寄らない。さて文士連と何の触しよく接せつ点てんがあるかと云うと、当時流行のある女優を、文士連も崇拜しているし、中尉達も崇拜しているに過ぎない。中尉達の方では、それに金を掛けていているだけが違う。それでも竜騎兵中尉は折々文士のいる卓たくに来て、余り気も附けずに話を聞いて、微笑

して、コニヤツクをもう一杯呑んで帰ることがある。

これが銀行員チルナウエルの大事件に出逢う因縁になったのである。チルナウエルはいつか文士卓たくの隅に据わることを許されていたのである。

*

*

*

ある日の事であつた。まだ時間は早い。文士卓にはもう大勢団ま樂とをしていて、隅の方には銀行員チルナウエルもいた。そこへ竜騎兵中尉が這入つて来て、平生の無頓着な、傲慢ごうまんな調子でこう云つた。

「諸君のうちで誰か世界を一周して来る気はありませんか。」

ただこれだけで、跡はなんにも言わない。青天の霹靂^{へきれき}である。一同^{しばら}暫くは茫然^{ぼうぜん}としていた。笑談^{じょうだん}だろうか。この貴族先生の顔色を見るに、そうは受け取れない。世界を一周する。誰一人それを望まないものはない。しかしどんな条件があるのだろうか、誰も猶予する。

「僕がしましょう。」興奮の余りに、上^うわ調子になった声で、チルナウエルが叫んだ。

「その日数だけ休暇^{きゅうか}が貰^{もら}えるかね。半年は掛かるよ。」中尉はこう云つて、小さい銀行員を、頭から足まで見卸した。

「ええ。僕がいないと、銀行で差支えるのですが、どうにかして貰えないことはなかりうと思ひます。」実はこれ程容易な事はな

い。自分がいなくても好いことは、自分が一番好く知つてゐるのである。

「宜よろしい。それじゃあ、明みよう日にち邸やしきへ来てくれ給たまえ。何もかも話して聞せるから。」中尉はくるりと背中を向けて、同僚と一しよに店を出て行つた。

門かどぐち口ぐちに出ると、旆騎兵中尉が云つた。

「あれは誰だい。君に、君だの僕だのという、あの小男は。」

「僕と話をする時、君僕と云う男を一々覚えていられるものか。」
もつと

尤もである。竜騎兵中尉と君僕の交換をしている人はむやみに多いのだから。殊まわに少し酒が廻まわつていると、君僕の交際範囲が広くなる。そこで一いつたん旦君僕で話をした人に、跡で改まった口上も使

いにくい。とうとう誰^{たれ}彼^{かれ}となく君僕で話す。先方がそれに応ずると否とは、勝手である。竜騎兵中尉はこの返事をして間もなく、「そんなら」と云つて、別れそうにした。

「どこへ行く。」

「内へ帰る。書きものがある。」

「書きもの。」 旆騎兵中尉は、「気が違つたかい」と付け加えたかつたのを、我慢して呑み込んだ。

「うん。書きものだ。」 こう云うとたんに、丁度美しい小娘がジユポンの裾^{すそ}を撮^{つま}んで、ぬかるみを跨^{また}ごうとしているのを見附けた。竜騎兵中尉は、左の手に^{つか}を握つていた軍刀を高く持ち上げて、極めて熱心にその娘の足附きを見ていたが、跨いでしまったのを

見届けて、長い脚を大股おおまたに踏んで、その場を立ち去った。

*

*

*

陸軍竜騎兵中尉伯爵ポルジイ・キルヒネツゲルは實際邸へ帰った。そして夜の更けるまで書きものをしていた。友達の旆騎兵中尉は、「なに、色文いろぶみだろう」と、自ら慰めるみずかように、跡で独ひとり言ことを言っていたが、色文なんぞではなかった。

ポルジイは非常な決心と抑えた怒いかりとを以て、書きものに従事している。夕食にはいつも外へ出るのだが、今日は従卒に内へ持つて来させた。食事の時は、赤葡萄酒ぶどうしゆを大ぶ飲んで、しまいにコニヤツクを一杯飲んだ。

翌日まだ書いている。前日より一層劇しい怒を以て、書いている。いやな事と云うものは、する時間が長引くだけいやになるからである。午頃ひるごろになつて、一寸町ちよつとへ出た。何か少し食つて、黒ビールを一杯引つ掛けて歸つて、また書いています。

ようよう銀行員の来る前に書いてしまった。右の腕を、虚空を斫きるように、猛烈に二三次振つて、自分の力量と弾力との衰えないのを試めして見て、独り自ら喜んだ。それから書いたものをざつと読んで見た。かなりの出来である。格別読みづらくはない。いよいよ遣やらなくてはならないとなると、遣れるものだと、自分で満足した。

そう思うと同時に、平生の傲慢が萌きざす。幸さいわいな事には、いつまで

もこんな事をする必要がない。出来たからって、えらがるのは、沙汰さたの限りだ。こう思うと、頗る愉快になつて来た。

その時銀行員は戸を叩たたいた。ポルジイは這入らせはしたが、ちよつと誰たれだったか、何の用で来させたかと云うことを忘れて、ようよう思い出した。それから頗る慇懃いんぎんに待遇した。

さて一切の用件を話して聞せた。

それを聞いたチルナウエルには、なぜそんな事をさせられるのだかは、分からないが、どんな事をすれば好いと云うことだけは、すっかり飲み込めた。チルナウエルも氣の利いた男でポルジイも物をはつきり言う男だからである。そのはつきり言うのは、軍隊で命令をしつけているからである。

チルナウエルは地図、旅行案内、紹介状、旅行券を受け取った。紹介状はどこで誰に渡せと云うことを、一々はつきり言い附けられた。そして少からぬ金額を旅費として受け取った。最後に暇いとま乞ごいいをしようとした時、名所記類を一山授けた。ポルジイは頭痛に病みながら、これを調べたのであった。

さてこの一切の物を受け取って、前に立っている銀行員を、ポルジイ中尉は批評眼で暫く見て、余り感心しない様子で云った。「君も少し姿勢がどうかならんかねえ。気を付けて見給え。損の行かない話だ。」

これは少し冤罪えんざいであつた。勿論もちろんこの銀行員の風采は、伯爵中尉と比べることは出来ない。しかし世間せけん並なみから言えば、かな

りの男振りで、立派に通用するのである。

ポルジイは暇を遣るとき握手して遣ることは出来なかつた。それは自分の手が両方共塞がっていたからである。右には紙巻烟草を持っていた。左には鞭を持っていた。鞭を持っていたのは、慣れない為事で草臥れた跡で、一鞍乗って、それから身分相應の気晴らしをしようと思つたからである。

その晩のうちにチルナウエルは汽船に乗り込んで、南へ向けて立つた。最初に着く土地はトリエストである。それから先きへ先きへと、東の方へ向けて、不思議の国へ行くのである。

さて到る処で紹介状を出すと、どこでも非常に厚く待遇する。いかに自分の勤めている銀行が大銀行だとしても、その中のいて

もいなくても好い役人の受くべき待遇ではない。そこでチルナウエルは次第に小さい銀行員たることを忘れて、次第に昔話の魔法で化ばかされた王子になりすました。

珈琲店では新しい話の種がたっぷり出来た。伯爵中尉の気まぐれも非常であるが、小さい銀行員のぎようこう僥倖も非常である。あんな結構な旅行を、何もあのチルナウエルにさせないでも好きそんなものだ。誰だつて同じ旅行が出来たら、あの男よりは有利にそれをし遂とげるだろうに。

チルナウエルの旅程が遠くなればなる程、跡に残っている連中の悪口はひどくなる。もう幾月か立つたので、なんに付けても悪く言う。葉書が来ない。そりや高慢になった。来た。そりや見せ

びらかす。チルナウエルの身になつては、どうして好いか分らない。

竜騎兵中尉も消え失せたようにいなくなつた。いつも盛んな事ばかりして、人に評判せられたものが、今はどこにいるか、誰も知らない。

*

*

*

ポルジイは大した世襲財産のある伯爵家の未来の主人である。親類には大きいあまでら尼寺の長老になつてゐるあまぎみ尼君が大勢あつて、それがこの活かっぱつ澆な美少年を、やたらに甘やかすのである。

二三年勤める積つもりで、陸軍には出た。大尉になり次第や罷めるはず

である。それを一段落として、身分相応に結婚して、ボヘミアにある広い田畑を受け取ることになっている。結婚の相手の令嬢も、疾とつくに内定してある。令嬢フィニイはキルヒネツグ領のキルヒネツゲル伯爵夫人になるのが本望である。この社会では結婚前は勿論、結婚してからも、さ程嚴重に束縛せられないと云うことを、令嬢は好く知っているのである。

勿論ポルジイの品行は随分ひどい。しかし女達に追い廻されて
いる男だと云う所を酌量して遣らなくてはならない。馬は目醒めざま
しい上手である。その外青年貴族のするような事には、何にも熟
練している。馬の体の事は、毛櫛けくしが知っているより好く知ってい
る。女の容色の事も、外に真似手のない程精くわしく心得ている。ポ

ルジイが一度好いと云つた女の周囲には、耳食じしょくの徒とが集まつて来て、その女はおおぬさ大幣ひくての引手あまたになる。それに学問というものを一切していないのが、最も及ぶべからざる処である。うぶで、無邪氣で、何事に逢つても挫折ざせつしない元氣を持っている。物に拘こ泥うでいしない、思索ということをしなない、純血な人間に出来るだけの受用をする。いつも何か事あれかしと、居合腰いあいごしをしているのである。

それだから金かねのいること夥おびただしい。定額では所詮しよせん足らない。尼寺のおばさん達が、表面に口小言くちこごとを言つて、内心に驚きよう歎たんしながら、折々送つてくれる補助金を加えても足りない。ウイイン市内で金貸業をしているものは多いが、一人にんとしてポルジイと

取引をしたことのないものはない。いざ金がいるとなると、ポルジイはどんな危険な相談にでも乗る。お負まけにそれを洒々しゃしゃらく落おち々らくたる態度で遣なつて除のける。ある時ポルジイはプリユウンといくだものう果くだものの干したのをぶら下げている。それはボスニア産のプリユウン二千俵を買って、それを仲買に四分の一の代価で売り払った時の事である。これ程の大損をさせるプリユウンというものを、好くも見ずに置くのは遺憾いかんだと云って、時計の鎖くわに下げたのである。またある時はどこかの二等線路を一手に引き受けられる程の数のすう機関車を所有していた。またある時は、平生活人かつしんが画以上の面白味は解かせないくせに、歴代の名作のある画廊を経営していた。一体い体たいどうしてこんな事件に続々関係するかと云うに、それはこうで

ある。 おうきようこく 壕匈国では高利貸しが厳禁せられている。犯すと重い刑に処せられる。そこで名義さえ附くと好い。ボスニア産のプリユウンであろうが、機関車であろうが、レンブラントの名画であろうが、それを大金で買って、気に入らないから、直ぐに廉価に売るには、何の差支もない。これは立派な売買である。仲買にたつぷり握らせて、自分も現金を融通する。仲買は公民権を失うような危険を冒さずに済むのである。

丁度この話の出来事があった時、いつも女に追い掛けられているポルジイが、珍らしく自分の方から女に懸想けそうしていた。女じよしよ色の趣味は生来解かいしている。これは遺伝である。そこで目差す女が平凡な容貌ようぼうでないことは、言うまでもない。女は女優であ

る。遊んだり、人のおもちやになつたりしていずに、少し稽古けいこでもしたら、立派な俳優になつた女かも知れない。どうかして舞台で旨い事うまいことをしたのを、劇評家が見て、あれは好く導いて発展させたら、立派なものになるだろうにと、惜おしんで遣ることもある。しかしその発展が出来ないで、永遠に愛くるしい見せ物に甘んじている。その名はドリスである。

ドリス自身には、技芸ぎげいの発展が出来なくて気の毒だのなんのと云つたつて、分からないかも知れない。結構きよくなくめの境きよう界かいである。崇拜者に取り巻かれていて、望みなら何一つかな慚なわないことはない。余り結構過ぎると云つても好い位である。

ドリスは可哀らしい情婦としてはこの上のない女である。不機

嫌な時がない。反抗しない。それに好い女と云う意味から云えば、どの女だつてドリスより好く見えようがない。人を悩殺する媚こびがある。凡すべて盛りすべの短い生物いきものには、生活に対する飢渴があるものだが、それをドリスは強く感じている。それが優しい、褐色の、余り大きいとさえ云いたいような、余りきらきらする潤いが有り過ぎるような目の中から耀かがやいて見える。

無邪気な事は小児のようである。軽はずみの中にさえ、子供めいた、人の好げな処がある。物を遣れば喜ぶ。装飾品が大好きである。それはこの女には似合わしい事である。さてそんならその贈おくりものばかりで、人の自由になるかと云うと、そうではない。好きな人にでなくては靡なびかない。そしてきのう貰った高価の装飾品

をでも、その贈おくりぬし主ぬしがきよう金かねに困ると云えば、平気で戻してくれる。もしその困る人が一晩の間あいだに急に可哀くなつた別人なら、その別人にでも平気で投げ出してくれる。

ポルジイとドリスとはその頃無類の、好く似合つた一対だと称せられていた。これは誰でもそう思う。どこへでも二人が並んで顔を出すと、人が皆囁ささやき合う。男はしっかりして危あやうげがなく、力が溢あふれて人を凌しのいで行く。女はすらりとして、内ない々ない少し太り掛けていると云う風の体付きである。まるで娘のように見える。手なんぞは極小くて、どうしてあれで大金たいきんを払い出すことが出来るだろうと怪まれる。一体金かねと云う概念については、この女程分からずにいるものは少かろう。その位だから、我身わがの未来なん

ぞと云うことも、秘蔵ひぞうこ子が考えないと同じように考えないでいる。

こう云う二人が出逢つたのだから、面白く月日を送ることは、この上もない。勿論その入費は非常である。ポルジイのドリスを愛することは、知り合いになつてから、月日が立つと共に、深くなつて来る。どんなに面白い女か、どんな途方もない落想らくそつのあつる女かと云うことが、段々知れて来るのである。貴族仲間の禁物は退屈と云うものであるに、ポルジイはこの女と一しよにいて、その退屈を感じたことが、かつてない。ドリスはフランス語を旨く話す。立居振舞は立派な上流の婦人であつて、その底には人を馬鹿にした、大胆な行を隠している。ピアノを上手に弾いて、ク

プレエを歌う。その時は周囲が知らず識らずの間にあいだ浮かれ出してしまふ。先ずこんなわけで、いつの間にかポルジイは真面目まじめにドリスに結婚を申し込んだと云う噂が伝えられた。

これはひどく人の耳目を聳動しょうどうした。尤もこれに驚かされたのは、ストロオガツセなる伯爵キルヒネツゲル家の邸の人々である。

邸あたりでは、人生一切の事物をただ二つの概念で判断している。曰く身分相応いわ、曰く身分不相応、この二つである。ポルジイがドリスを囲って世話をして置く。これは身分相応の行為である。なぜと云うに、あれは伯爵の持物だと云われても、恥ずかしくない、意気な女だからである。どうもそれにしても、ポルジイは余

り所嫌わずにそれを連れ歩くようではあるが、それは兎角そうなり易い習だやすならいと見れば見られる。しかしドリスを伯爵夫人にするとなると、それは身分不相応の行為である。一大不幸である。どうかして妨害せねばならぬ。

さてどうしたものだろう。困る事には、ポルジイは依怙地えこじな奴やつで、それが出来ないなら云々うんうんすると、暗に種々の秘密を示して脅かすおびや。それが総て身分不相応な事である。そこで邸では幾度いくたびとなく秘密の親族会議が開かれた。弁護士や、ポルジイと金銭上の取引をしたもの共が、参考に呼び出される。プラハとウイインとの間を、幾人かの尼君達が旅行せられる。實際鉄道庁で、この線路の列車の往復を一時増加しようかと評議をした位である。無

論急行で、一等車ばかりを聯結れんけつしようとするのであった。

その会議の結果はこうである。親族一同はポルジイに二つの道を示して、そのどれかを行わなくてはならないことにした。その一は軍職を罷めて、耕作地の経営に長じているという噂のあるおじさんのいる、スラヴ領の莊園そうえんに行つて、農業を研究するのである。ポルジイはこれを承つてうけたまわ、乱暴にも、「それでは肥料車こえぐるまの積つみおろし載おろしの修行をするのですな」と云つた。その二は世界を一周して来いと云うのである。半年程留守を明けて、変つた事物を見聞して来るうちには、ドリスを忘れるだろうと云うのである。勿論漫遊だつて、身分相応にするので、見て廻らなくてはならない箇所が頗る多い。　　おうきよようこく　　奥匈国で領事の置いてある所では、必ず

面会しなくてはならない。見聞した事は詳細に書き留めて、領事の証明書を添えて、親戚しんせきに報告しなくてはならない。

ポルジイは会議の結果に服従しなくてはならない。腹を立てて、色々な物を従卒に打ち付けてこわした。ドリスを棄すてようか。それは「絶待」に不可能である。少し用心深く言つたところで、

「当分」不可能である。罷職ひしよくになつて、スラヴ領へ行つて、厚皮の長靴を穿はく。飛んでもない事だ。世界を一周する。知識欲が丸でなくて、紀行文を書くなんと云うことに興味を有せない身にとつては、余り馬鹿らしい。

こう考えた末、ポルジイは今時の貴族の青年も、偉大なる恋愛のためには、いかなる犠牲をも辞せないと云うことを証明するに

至った。ポルジイは始て思索を費した。大部の紀行類を読んだ。そして意気な女と遊ぶ夜を、寂しい我居間に閉じ籠こもつていて、書きものをした。

*

*

*

銀行員は遠く、いよいよ遠く故郷の空を離れて、見馴なれぬ物という物を見て歩く。言い附けられた事は、きちんきちんとする。それ程込み入って、覚えていくにくいような事ではない。言語挙動も役相応に見られるようになった。訪問すべき人を訪問して、滞留日数に応じて何本と極めてある手紙を出した跡は、自分の勝手な楽もする。段々鋭くなつた目で観察もする。

しかし一つの恐怖心が次第に増長する。それは不意に我身の上に授けられた、夢物語めいた幸福が、遠からず消え失せてしまつて、跡には銀行のいてもいなくても好い小役人が残ると云うことである。少くも半年間は、いてもいなくても好いと云うことを、立派に上役から証明せられているのである。この恐怖心を懐いて、チルナウエルは生涯の思出だと思ひながら、出来るだけの受用をしてゐる。

伯爵家では郵便が来る度に、跡継ぎの報告を受け取つて、その旅行の滞なく捗つて行くの喜び、また自分達の計略の図に当たつたのを喜んでゐる。金は随分掛かる。しかし構わない。旅行は功を奏するに違ひないからである。それに報告が存外立派に書ける。

殊に書物をも少しは読む尼君達さえ、立派だと云つて褒めて、学問をしなかつたのが惜しいと思つてゐる。伯爵夫人になりたがつてゐる令嬢にも、報告が気に入つてゐる。

*

*

*

この間あいだポルジイとドリスとの二人は悪くない目に逢つてゐる。

旅費に貰つた金を皆みな銀行員に遣るには及ばないから、かなりたつぷり除けて置いた。勿論今までのように途方もない贅ぜいたく沢は出来ない。

先ずノイレングバハに別荘を借りた。ウイインから急行で半時間掛かる。風景はなかなか好い。そして丸で人が来ない。そこに

二人は気楽に住んでいる。風来もののドリスがどの位面白い家持ちをするかと云うことが、始て経験せられた。こせこせした秩序に構わないで、住心地の好いようにしてくれる。それになかなか品位を保っている。なんの役も勤まる女である。

二人きりで寂しくばかり暮しているというわけではない。ドリスの方は折々人に顔を見せないと、人がどうしたかと思つて、疑つて穿鑿せんさくをし始めようものなら、どんなまずい事になるかも知れない。詐偽さぎの全体が発覚すまいものでもない。そこで芝居けへ稽古いこに行く。買物に出る。デルビイの店へも、人に怪まれない位にちよいちよ顔を出して、ポルジイの留守を物足らなく思うと云う話をも聞く。ついでに賭かけにも勝つて、金かねを儲もうける。何につけて

も運の好い女である。

舞台が済んで帰る時には、ポルジイが人の目に掛からないように、物蔭に、外套がいつうの領えりを馬鹿に高く立てて、たたずんでいる。ヒュツテルドルフまで出迎えている時もある。停車場に來ている時もある。生死に關すると云う程でもなく、ちよいとした危険があるのを冒すのが、なんとも云えないように面白い。ポルジイはまだ子供らしく、こんなかくれん坊の興味を感じる。ドリスも冒険という冒険が好きだから、同じように嬉うれしがる。芝居のない日には、朝から晩まで差向いで楽しむ。

折々極親しい友達を呼んで來る。内証の宴会をする。それがまた愉快である。どうかすると盛んな酒盛になる。ドリスが色々な

思附きをして興を添えてくれる。ドリスが端倪すべからず、涸渴かつすることのない生活の喜びを持つているのが、こんな時にも発揮せられる。この宴会に来たものは、永くその面白さを忘れずにいて、ポルジイが柄にない、気の利いた事をして、のん気に歓楽を極めているのを羨うらやんだ。

こんな風に二人は、この山毛櫟ぶなに囲まれた片田舎で、これまでにない、面白い一春を過した。春というものの華やかさと楽しさとは、二人に迎合して遊ばせてくれた。轡くつわを並べて遠乗をして、美しい谷間から、遙はるかにアルピイの青い山を望んだこともある。

町に育つて芝居者になつたドリスがためには、何もかも目新しい。その知らない事を言つて聞せるのが、またポルジイがために

は面白い。ドリスが珍らしがるのは無理もない。これまでした旅行は、夏になってイツシユルなぞへ行っただけである。景色が好いの、空気が新鮮だのと云うのは言いわけで、実は外のほか楽しみの出来ない土地へ行っただけである。こんな風で休暇は立ってしまった。そして存外物入りは少かった。

夏もいつか過ぎて、秋の雨が降り出した。ドリスはまた毎日ウイインへ出る。面白い話を土産に持って帰る。楽屋がくやおち落の処に、特殊の興味のあるような話で、それをまた面白く可笑しく話して聞せる。おか

しかしポルジイにはそれが面白くなくなつて来た。折角の話を半分しか聞かないことがある。自分の行きたくて行かれない処の

話を、人伝ひとづてに聞いては満足が出来なくたつた。あらゆる面白い事のあるウイインは鼻の先きにある。それを行つて見ずに、ぐずぐずしていて、朝夕お極まりに涌わき上がつて来る、悲しい霧を見ているのである。実に退屈である。ドリスがいかに巧みに機嫌を取つてくれても、歡樂の天地しきいの闕けつの外がわに立つて、中に這入る事の出来ない恨うらみを霽はらすには足らない。詰まらない友達が羨ましい。あの替玉の銀行員が、新しい物を見て歩いているのも羨ましい。いくら端倪すべからざるドリスでも、もう眺めていて目新しくはなくなつた。外ほかの女よりは面白いに違いないが、やはり同じ女である。

さてこうなつた所で、ポルジイはこれまで自分の身に覚えのな

い感情を発見した。それは妬ねたみである。ドリスの噂に上ぼる人が皆みな妬ねたましい。ドリスの逢つたと云う人が皆妬ねたましい。

それに別荘は夏住まいに出来ているのだから、余り気持ちが好くなくなつた。その中で焼餅やきもちばなし話をすると、いよいよ不愉快である。ドリスも毎日霧の中を往復するので咳せきをし出した。

舞台を休んで内にいる晩は、時間の過しように困る。女の話すとだけ聞くのに甘んじないで、根問ねどいをする、女はそんな目に逢つたことがないので厭いやがる。そして何の権利があつて、そんな事を問うのだから分からないとさえ思う。

とうとう喧嘩けんかをした。ドリスは喧嘩が大嫌いである。喧嘩で、一たび失つたこの女の歡心を取り戻すことは出来ない。それはポ

ルジイにも分かつているから、我ながら腑甲斐なく思う。しかし平生克己ということをしたことのない男だから、またしては怒いかりに任せて喧嘩をする。

ある日ドリスが失しつそう踪した。

暇いとまごい乞いもせず、こつそりいな

くなつた。焼餅喧嘩に懲こりたのである。ポルジイは独り残つて、

二つの学科を修行した。溜ためいき息の音楽を奏して、日を数える算術

をしたのである。

こう云うわけで、二つの出来事が落ち合った。小さい銀行員が漫遊から帰つて来て珍らしがられると云うことが一つ、ポルジイ中尉が再びウイインの交際社会に現われたと云うことが一つである。そしてポルジイの事を知っている人々の間あいだには、ドリスと切

れて、身分相応な結婚をするそうだという噂が立った。伯爵家の両親がこのなりゆき成行に満足して、計略の当つたのを喜ぶことは一通りでない。実に可哀い子には旅をさせろである。

小さい銀行員はまた銀行に通い始めた。経験が出来たので、段々上の役に進む。妻を迎える。その家の食堂には、漫遊の記念品が飾つてある。小役人の家の食堂とは思われない。主人チルナウエルは客にこんな事を言う。「わたくしがラホレのマハラジャの宮殿にいました時の事ですが」なんと云う。昔話をするのか、大おほ法螺おぼらを吹くのかと思われるのである。ところが、それが事実である。三方四方がめでたく納まった話であるから、チルナウエルは生涯人に話しても、一向差支はないのである。

(明治四十四年六月)

青空文庫情報

底本：「於母影 冬の王 森鷗外全集」ちくま文庫、筑摩書房
1996（平成8）年3月21日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：米田

2010年8月14日作成

2011年4月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

世界漫遊

ダウイット Jacob Julius David

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 森鷗外訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>